

大連から約400km離れた瀋陽には、特急で約4時間かかる。2008年7月に瀋陽に旅行したが、そのときのキップを記念にとっておいたのでそれを見ると、「新空調軟座特快」と印刷してあり、87元となっている。当時1元は15円位だったので、約1300円となるが、とても安い。空調付き特急の軟座、日本でいえばグリーン車になるのか。普通車の硬座に乗れば55元であるが、4時間も乗るのだから軟座に限る。中国の列車時刻表をみると、列車毎に空調があるか否かが表示されている。大連ではバスも普通1元だが空調付きの2元のバスも走っていた。空調は一つのレベルを示しているようだ。今どき列車くらいは長時間乗るのだからすべての列車に空調を付けるべきである。航空母艦まで建造し、不透明な軍事費の増大で周辺国はもとより国際社会に緊張を与えるくらいなら、民生に力を注ぐべきである。

この特急が駅を離れ、しばらくすると「ピンチリン、ピンチリン」という車内販売の声が近づいて来た。何元だったのか忘れたがアイスクリームは大好きなので1つ購入した。また、しばらくすると、別の車内販売がワゴンを押してきた。何を売っているのか見ると、「鶏のくんせい、ソーセージ、カップ麺、ひまわりのタネ、コーラ、スプライト、お菓子」等である。ちなみにピンチリンは中国語で「冰淇淋」と書く。ひまわりのタネは中国人はとても好きだ。お茶請けに、3時のおやつにいつもそばに置いている。口に入れたと思うと中の実を食べ外側のカラを器用に出す。私が1つ食べる間に5～6個は食べる。中国語の発音にも役立っているのかなと思ったりする。飲み物は、中国人はなぜかソフトドリンクではコーラとスプライトが好きだ。コーヒーや紅茶の文化が根づいていないこともあるがおいしい飲み物はいっぱいあるのに不思議で仕方ない。

特急は瀋陽に向かってひた走る。果てしなく続く畑を

左右に見ながら、一路北に進む。国土の広さを実感する。こうした風景は日本ではせいぜい北海道で見られるくらいだ。4時間も車窓から農村風景を見てると流石に疲れる。有名な山とか湖もなくとにかく変化がない。ひとねむりした頃ようやく瀋陽駅に着いた。しかしこの駅では下車しない。この瀋陽駅は満州国時代の奉天駅である。駅舎は日本の辰野金吾という著名な建築家がよくデザインした「辰野金吾式」によるものである。中央には丸いドーム屋根があり、少し小ぶりだが東京駅に似ている。当時としては、ずいぶん立派な駅舎であった。現在はこの駅から5分くらいのところに新しい近代的な「瀋陽北駅」が出来ていて、ここがこの地方の交通の中心となっている。今は取り壊されたが、満州国時代の長春駅(わんりい 171号11ページに掲載)も写真でしか見たことがないが重厚で貫禄のある駅舎で、ここも少し離れたところに新長春駅を造ってくれていたら、と残念である。瀋陽には3～4回行ったが、よく瀋陽北駅前の「瀋陽郵政大廈」という、日本でいえば日本郵政が経営しているようなホテルに泊まった。

さて瀋陽は、長春市に次いで満州国時代の色彩の濃い街であるが、街自体の歴史は比べものにならない程瀋陽が長い。従って満州国時代の名残りもあれば清代の故宮をはじめとする旧跡もある。街の名前は他の都市に見られないくらい何度も変わってきている。古くは漢代には「侯城」という名称であり、以下次のような変遷がある。瀋州(唐代)→瀋陽(元代)→盛涼(明代)→奉天府(清代)→奉天(満州国時代)→瀋陽(現在)、と過去2000年の中で6回も変わっている。この瀋陽という名前の由来は、「瀋水」とも呼ばれた大河の北に位置していることから来ている。風水の考えでは、北側は「陽」、南側は「陰」



十王亭



文選閣(四庫全書が納められている)



大成殿

であることから瀋陽になった。人口は約700万人で遼寧省の省都である。旧満州地方でもある東北三省は、モンゴル族、満族、回族、朝鮮族、ロシア民族などが入り交じり多くの国が興亡を繰り返してきた。今は漢民族が一番多いようだが、これは近世になっての移住によるものである。この東北三省の中心がこの瀋陽である。

約270年にわたり清帝国を築いた満族(女真族)は、この地に彼らの都を造りあげた。1625年に太祖(初代)ヌルハチは、それまでの遼陽から瀋陽に遷都して世界遺産に登録された瀋陽故宮を建設した。1644年に明から清へと天下は移り、3代目の順治帝が北京の紫禁城に入城した。そして1912年、12代皇帝となった溥儀まで清帝国は続いたのである。その帝国が崩壊したときから今年ちょうど100年目にあたる。

なお、遼陽であるが瀋陽より少し南にあるこの都市は、日露戦争の時「遼陽の会戦」が行われたところである。続いて「奉天の会戦」があり何とか日本軍がロシアに勝利し、陸上における戦いは終止符を打ち、日本海での海上での戦いになっていく。

翌朝、まず故宮に行くことにし、タクシーに乗り込んだ。ほどなくタクシーは「懐遠門」の前に着いた。故宮の入り口までタクシーで行けるが、ここから歩いた方がいいと友人は言う。この門は城門である。中国は主要な都市には城壁が築かれ、城内で皇帝から庶民に至るまで一緒に暮らし、外敵から身を守った。日本はその点他民族の外敵から攻められるということもほとんどなかったため、城内には殿様とその一族や家来だけが住み、庶民は城外で生活した。中国は多民族国家の上、常に外敵の脅威にさらされていたので、そのような必要に迫られたのであろう。瀋陽もその昔城壁が築かれていたが、現在はほとんど取り壊され、この懐遠門など一部にしか残っていない。随分立派な城門で、周囲の高層ビルにも引けを取らないほどだ。この門を潜ってまっ直ぐ数百メートル歩いた先が故宮である。門から故宮までの両側は、造

りがいかにも中国風で、100年は経っていると思われる建物が連なっている。それらには、家具店、薬局、酒店、そして中華レストランなどが入っている。

雰囲気のあるこの通りをゆっくり散策すると、まもなく「瀋陽故宮博物院」の前に着いた。見るとワイン色の塀が続き、その向こうに濃い黄色の屋根瓦がのぞいている。やはり北京の故宮と比べるとずいぶん小さめではある。とはいえ6万m²の広さがある。北京の故宮は72万m²あるというから瀋陽の約12倍の広さである。入場券を買って中に入る。この敷地内には大小90の建物があると説明書にあるが、どの建物も色合い、屋根のソリ具合、壁のレンガ色などがよく似ている。北京故宮の建物ともやはり似ている。それらの中で一度見たら忘れられないくらい美しい建物が大成殿である。この建物は八角形をしていて二重の構造の屋根が乗っている。別名を八角殿と言うそうだ。ここは式典を挙げる場所で、例えば1636年には第2代皇帝のホンタイジ(皇太極)が大清国の建国の式典を行っている。大政殿を背にして前面の石畳の広い通りをはさんで5棟ずつ向かい合うように建っているのが十王亭だ。十王亭は1つ1つは方形をした小さな建物で、その中には清の軍隊である八旗のそれぞれの武器が展示してある。この一角は故宮の中で一番特徴があり美しいエリアといえよう。もう一つ有名な建物が「文溯閣」と呼ばれるもので、四庫全書が納められている、いわば図書館である。四庫全書とは6代目の皇帝である乾隆帝が編集させた中国最大の書物群である。何しろ7万9582巻もあるというからそのための建物も必要なわけである。

ここで少し横道に入りたい。——中国を旅すると、時おり古文書館とでも呼ぶべき建物に出会う。以前浙江省の寧波市に行ったとき、「天一閣」という中国最古の書籍が保管されているという建物に案内してもらった。あれだけ国内で戦乱が続き、近年は文化大革命があったのによく残っているものだと思う。やはり紙(後漢時代、蔡倫が蔡侯紙という紙を発明したとされるが、それ以前にも紙らしいものがあったとの記録がある)や、印刷技術も世界に先駆けて発明した国だけのことはある。印刷技術があれば、どこかで焼失しても、別のところで残っていくということではなかろうか。さらに中国の名誉のために付言すれば、他にも火薬や羅針盤も世界で初めて発明している。我々は欧米史観で歴史等を勉強してきた。白人が何でも最初に発明したり、発見したとのイメージを学校で植つけさせられたが、東洋文明はかなりのジャンルで西洋の遙か先を走っていたのである。東洋人はもっと自信を持ち、かつ東洋史観の世界史を世界にアピールしなければならぬと思う。閑話休題。

(次号に続く)